「阿波農村舞台の会」設立総会

去る五月二十五日に総会を開催し、阿波農村舞台の会が発足しました。第一部の総会において、会則を決定し、役員等の選任、事業計画等の審議を行いました。

第二部では、「農村舞台の可能性」をテーマに川上副会長に記念講演をお願いしました。

第三部の記念パーティには、徳島市出身の俳優、高津住男さんと奥様の真屋順子さん、ご長男の健一郎さんが、かけつけてくださり、ごあいさついただきました。また、パーティのアトラクションとして、阿波人形浄瑠璃研究会青年座のみなさんに三番叟をご披露いただきました。

●とき　平成十五年五月二十五日(日)
午後四時～八時
●ところ　徳島東急イン六階
第二部総会(眉山の間)午後四時～五時
●参加者
総会・記念講演　六十八名
記念パーティ　五十七名

第一部　総会　午後四時～五時
●会則審議・原案のとおり承認
●運営委員の選任(敬称略)
大和武生、林茂樹、川上光洋、浅香寿穂、小川一清、磯本宏紀、岩朝利治、岩佐俊彦、大塚実輝、大坪潤一、小原伸二、川上一、川村一道、喜多順三、久米将夫、佐藤憲治、庄武憲子、玉井啓行、丁山俊彦、富田真二、新居福夫、花岡憲司、板東哲夫、森恵子、森英樹、山口武治、吉崎住夫、吉原美恵子
●事業計画、予算、ワーキンググループの設置について審議・原案のとおり承認
●会員からの意見
過去どういったものに使われていたか、また、どういうプロセスで公演を実施していたか、といった点について十分調査する必要がある。NHKなどに残されている映像資料や記録、今ならまだご存命の方もいるのではないか。・・・今後の会の活動の中でできる限り反映する。
●役員の選任(敬称略)
会長　大和武生、
副会長　林茂樹、川上光洋、
総会(休憩後再会)
●会長・副会長人事の承認
●その他役員の指名・承認(敬称略)
監事　浅香寿穂、小川一清
事務局長　林茂樹
●顧問の委嘱(敬称略)
NHK徳島放送局　局長
山崎大樹
社団法人徳島新聞社　理事社長
坂田雄幸
四国放送株式会社　代表取締役社長
近藤守
財団法人徳島県文化振興財団　理事長
安藝武
財団法人阿波人形浄瑠璃振興会　会長
三木俊治
阿波木偶作家協会　会長
桑原信義

第二部　記念講演　午後五時～五時五〇分
●演題　「農村舞台の可能性」
●講師　川上光洋東京理科大学講師

第三部　記念パーティ　午後六時～八時
●大和会長あいさつ
●顧問代表あいさつ(山崎顧問)
●高津住男氏、真屋順子氏、高津健一郎氏あいさつ
●乾杯(三木顧問)
●アトラクション　阿波人形浄瑠璃研究会青年座による三番叟
●閉会の言葉　乾　晴美氏

川上副会長の記念講演

総会の様子

高津住男氏・真屋順子氏・高津健一郎氏

青年座による三番叟

復活への一歩
法市の農村舞台説明会

川上光洋

平成十五年五月二十六日、三好町法市の農村舞台を会場に、村人らを集め、農村舞台の再生・活用について話し合った。法市の農村舞台は、全国的にも珍しい仮設式舟底舞台の仕組みをもつ。まず、川上(東京理科大学)が舞台建築の仕組を説明し、続いて青年座による人形芝居(三番叟)を上演した。最後に、「秋祭りに人形芝居を楽しもう」と農村舞台の復活を誓い合った。

●法市の農村舞台

法市は、讃岐山系の懐に抱かれた小さな峠の集落だ。村人の多くは、急傾斜の山肌でタバコをつくっている。農村舞台は、氏神を祀る船渡神社境内に所在する。建物は木造平屋建て(間口五間、奥行二間半)、明治三十二年(一八九九)に地元の大工によって建てられたもの。かくべつ大きな材を惜しげもなく使っている。大棟に龍を飾りつけた入母屋造の瓦屋根にも、舞台を普請した村人たちのただ事ではない心情が伝わってくる。いつもは拝殿として使われているが、人形芝居にも兼用できるよう仮設式の舟底舞台の構造をもつ。その仕組みは至って簡単で、誰でも作業できるよう工夫されている。取り外しのできる数枚のパネル状の床板を舞台迫のように床下に落とし込むことで、平舞台(大広間)から舟底舞台(人形芝居専用舞台)へと転換する。

●農村舞台説明会

説明会の当日、前日から降り続いた雨も午後になってあがり、すっきりと晴れわたった。神社より一〇〇mほど手前で車を乗り捨て、そこから先は歩きだ。ようやく参道入り口にたどり着いたとき、目の前の光景に驚いた。いつもは人気もまばらな静かな集落だ。ところが、この日ばかりはおよそ三十名の村人が船渡神社に集まっていた。家族総出だった。村人たちは、持ち寄った椅子に腰をかけ、お茶を飲み、和やかにくつろぎながら、気さくな笑顔で私たちを迎え入れてくれた。

それだけではなかった、舞台に歩み寄ってさらに驚かされた。すでに、舟底舞台へと転換されているではないか。実は、リフォームによって新しく入れられた間仕切りを取り外し、建築当初の状態に戻さないことには、舟底舞台に転換することはできない状態にあった。説明会のために、村人たちは、人手を集めて数日前から準備をしてくれていたのだった。自然と説明にも力がはいる。すべてを露にした舟底舞台を前に、隠されていた数々の仕掛けが分かってきた。ひとつひとつの部材を手にとり、舞台転換の仕組みを具体的に検証した。私の説明に合わせて村人たちも言葉を弾ませた。「小屋裏に舞台の仕掛けがある・・・」。どうやら村人たちは、舞台を覆っていた新建材を剥ぎ取っていくうちに、忘れさられていた舞台の仕掛けを発見したらしい。村人と一緒になって復元し、舞台の本当の姿が見えてきた。

続いて、舟底舞台を三番叟が舞った。それは、青年座の上演だ。私と青年座は以前から農村舞台活用支援組織を構想し、法市の農村舞台をはじめ各地の農村舞台の活用を住民に説得して廻ったりもしていた。そうした活動のなかで、農村舞台の説明に人形芝居を実演してみせることを半年前から計画していた。というのも、農村舞台があっても、そこで人形芝居が上演されていたのは遠い昔に遡る。そのため、ほとんどの村人は人形芝居を観たことがなく、人形芝居に対する馴染みは非常に薄い。農村舞台を復活させるためには、舞台建築と同時に人形芝居の面白さを理解してもらうことが非常に重要と思われたからだ。実際、法市でも、この農村舞台で人形芝居を観たものはいない。

試しの実演とはいえ、農村舞台で操ることを憧憬していた青年座にとって、緊張の舞台だった。それにしても村人たちの関心は思った以上に高い。手摺をはさんではいるものの、いつの間にか人形と村人は信じられないほどの近さに相対していた。伴奏のない素朴な舞だったが、なんともいえぬ親しみを感じる上演に拍手が鳴り響いた。公演の後、青年座による人形講座が開かれた。人形の仕組みの説明に、村人たちは食い入るように耳を傾けた。やがて笑い声がひときわ大きくなった。それもそのはず、村人の一人がみようみまねで人形を操っていた。舞台に興じる村人たちの生き生きとした表情が強く印象に残っている。

●農村舞台説明会を振り返って

法市集落の過疎化は激しい。村人のほとんどが高齢者だ。子供や孫は法市を離れ都会へと出て行き、徳島市や大阪にいる。

農村舞台をゆかしそうに眺めながら、村人たちは語った。「今年のお祭りは、孫をよんで人形芝居をしよう」。子供や孫のために、ふるさとのお祭りを守っていこう。誰もがそう感じていた人は故郷を離れ都会の生活にかぶれても、「まつり」という言葉、情景、記憶を通して、平素は眠っている郷愁がふと目覚めて、忘れかけていたふるさと(風景や人情など)を手繰り寄せることができるかもしれない。農村舞台は、法市のような過疎地にとって、祭りを盛り上げ、人々の活動に活気を与え、ふるさとへの愛着を実らせる種になるだろう。ゆっくりと種を育てていくように、いつか法市の農村舞台が復活することを期待したい。

説明会を終えて、忘れられないものがもうひとつある。それは野いちごの味だ。舞台周辺のいたるところに野いちごが群生していた。それを一粒つまんだとき、その美味しさに戦慄がはしった。この野いちごのように、農村舞台が、私たちの忘れかけていたかけがえのない感覚を蘇らせてくれることを願いたい。

掲載　ホームページ「農村舞台ねっと」http://homepage3.nifty.com/rctn/